



やすおか
「泰阜ひとねる大学」って?

泰阜村のもつ自然や人々の暮らしを、都市に暮らす若者が
カラダとココロで体感・学習する。

泰阜村の人々と都市の若者が一緒になって、
まなびあい、そだちあう、ひとねる(人を育てる)。
そんな大学です。



誰が運営しているの?

泰阜村、NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター、NPO法人泰阜グリーンツーリズム研究会、
観光協会等が「ひとねる大学推進チーム」を結成し、運営しています。

すべての人の大学

- 修学旅行に.....小学生から高校生まで、「暮らしをつくる力」を育みます。
- ゼミ合宿・インターンシップに...学生の「生き抜く力」を育みます。
- 社会人研修に.....社会人の「つながる力」を育みます。
- 教員研修に.....教える立場、指導者としての「大切なこと」に気づきます。

他、都会からちょっと離れてみたい方々に、いつもの旅行+αなど。

※プログラム、カリキュラム内容等はお相談ください。

ごあいさつ

泰阜村ひとねる大学 学長 松島 貞治 (泰阜村長)



「人成る」は、人間が成長していくことを意味する言葉だが、村の先輩たちは、子供が成長して大きくなった姿をみて「ひとなつたなあ」という。身体が大きくなるだけでなく、心身ともに成長したという表現ですばらしいと思う。この「人なる」が子供を育てる意味で使ったとき先輩たちは「ひとねる」と言う。私の祖母などは、ひとねるが通常の言葉であった。教育と比較して山村の中で人が育つという意味合いを考えれば何と格調高い言葉であろうか。耕地も少なく、観光地でもなく、都市とも離れているこの山村で生き抜いてきた先輩たちのその生活力の中にこそ「教育力」があることを見抜いたNPO法人グリーンウッドは、すでにこの泰阜村を基盤に注目を浴びている。その教育力から学びたいという若者がたくさんいて、その輪が広がりがつつある。

この輪をそのまま「ひとねる大学」ということにした。国が総合学習の中で生きる力を育む教育を、と言ったことがあるが、その生きる力の源泉がこの村にあり、そこから学ぶことがたくさんあるという。地方創生が叫ばれるが、地方を元気にする方策がすぐ見つかるはずがない。見つけたとしても、この村の歴史や風土から離れた施策は、長続きしない一過性になる。この「ひとねる大学」は、泰阜村にとっての重要な地方創生施策であるが、決してすぐ結果が出るようなものではない。しかし、若者にアプローチする方策がなかなか見いだせない山村にとって、若者に学びを提供するという、地に足をつけた地道な活動が10年後、20年後に花を咲かせることになる。そんな期待を抱かせる大学が発足し、うれしい限りである。

この村が大学になる

泰阜ひとねる大学推進チーム
チームリーダー 辻 英之
(NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事)



2016年、泰阜ひとねる大学が発足した。それは、泰阜村長が学長となり、そして村民が教授になるユニークな学びの場。人口1,700人の小さな村の行政、住民、NPO、そして大学が協働して、2~4年かけて若者をひとねる(「育てる」という意味の方言)仕組みづくりへの挑戦でもある。初年度は名古屋短期大学と共に、ひとねる大学の構想をカタチにしてきた。学生と村民が、村と名古屋を何度も何度も往復した。この「何度も往復する」というのが胆である。1回だけの交流では、学びの質が深まらない。息の長い、そして丁寧な往復が、学生と村民の学びの質を高める。泰阜村の教育力が、ジワジワとだが確かに彼女たちの身体に流れた。この村には、学生や若者を育てる教育力がある。その滲み出るように産まれる教育力を、今こそ発揮する時が来ている。ひとねる大学が、学びと育ちの素敵なモデルを創る。「この村が大学になる」。その日は近い。

人の本質をねる場所

愛知教育大学
教授 大鹿 聖公 氏
(ESD推進のための先導的拠点整備業務 中部地区アドバイザー)



泰阜ひとねる大学は、人間の成長に最も必要な人と人のつながりを育む場である。泰阜村がもつ豊かな自然環境、それを活かしながら生活を紡ぐ地元の人びと。この知恵と経験は、現代のICTによる情報技術のみでは若い世代には伝わらない。現地に足を運んで実際に体験し、語り合うことでのみ伝えられる。体験や語り合いで重要なのは、都会と自然、若者と高齢者など、価値観や立場などが異なるものが関わり合うことである。お互い立場や環境の異なる人間が介することによって、お互いの良さを認め合い、また協力しあうことで、お互いが成長していける。そのような人と人をつなぐ場を提供するひとねる大学は、まさに、人の本質をねる場所だと思う。人をねることは簡単ではない。きっかけの場の提供だけでなく、今後、若い世代が繰り返し紡いでいけるようなプログラムや展開を期待したい。

Message from 環境省中部環境パートナーシップオフィス (EPO中部)

「泰阜ひとねる大学推進チーム」と意見を重ね、「泰阜ひとねる大学」が目指している「村そのものが大学」という構想に共感した。泰阜村では、村のもつ力を引き出し、いくつもの学びの場をつくり、人々の育ちを支えてきた。その教育力を包括的に体系的に展開する、それが「泰阜ひとねる大学」だ。今年度、環境省事業として実施し、私たちは都市部にある短大2年生のゼミナール活動、1年次に泰阜村に出会い、村の魅力に気づいた学生たちを追いかけた。夏合宿、ゼミナール活動、大学祭、村への提案を発表した報告会、愛知教育大学で学生が担当した講義を

訪れた。学生の思いを深く聞きたいと、インタビューをした。泰阜村での体験によって自信に満ち溢れた学生の言葉に圧巻だった。と同時に、学生に寄り添った村の人々の柔らかさ、その空間づくりを支えているチームメンバーの情熱に触れた。「泰阜ひとねる大学」には、持続可能な社会をつくる学びの根源がある。地域の風土と人々の暮らしを何よりも大切にしている泰阜村、「ひとねる」空間の主人公になれる。泰阜ひとねる大学の魅力を多くの人に触れてほしい。みんなの思いあふれる、このパンフレットをつくった。





学生の思い

みんな仲良しで心があったかい人がすごく多い。初めて来た私達のことも全然知らないのに、それぞれの家庭で受け入れてくれたり、何か分からないことがあったら、すぐ「大丈夫?」って言って来てくれたり。自分の住んでいるところにはない、ぬくもりがあるな。

今から住むとなると、ちょっと難しいかな。合宿が終わった時にみんなで「来年またみんなでこれたらいいね」って話をしてたから、みんなで一緒に行きたいな。

コンビニもない、信号もない村みたいなことを最初に教えてもらっていて、それだけ聞いた時は、えーっと。やっぱり写真とかそういう言葉だけでは伝わらない、行ってみて人の温かさとかを感じて、いいところだと思って。



今、サラダとか食べたいと思ったら、コンビニで300円くらい払えば買える。泰阜村だったら種から植えて、畑を耕して、それで得られるサラダだからこそ美味しい。泰阜村はバイトしなくても大変さがあるけどおいしいものが食べられる。でも、今はそのためにバイトしないとイケない。時間のためにお金を使っている。



不便なことが多い分、助け合わなければいけなかったり、一人じゃできないこともたくさんある。そういう時にみんなで協力するんじゃないかな。

自分にはおじいちゃん、おばあちゃんがもういないので、「第2のふるさと」かな。

何年後かに同窓会とかで行きたいです。



ちょっと行ってみたいなと感じた若い人がふらっと行って、向こうの人と触れ合って、また帰ってきて、またちょっと疲れたから行ってみる。心を休めるっていう場面でいろんな若い人達が行ったらいいんじゃないかな。



体験できないことを体験できるし、そういうところに魅かれる人が絶対いる。でも、泰阜村を知らない人はたくさんいる。気軽に行ける環境があれば足を運びやすい。1泊2日でも自分でつくり出すキャンプとかツアーとかがあったら、もっといろいろな人が行くんじゃないかな。

ふって、たまに帰りたくなる場所だなと今感じていて、もう少し経ってから誰かを連れてったら、ここまでではないかもしれないけど少し何か似たような感情を抱いてもらえると思う。



泰阜村にある何か

茶谷 淳一 先生

(名古屋短期大学現代教養学科 学科長/教授)



泰阜ひとねる大学によって起こった変化のなかで最も顕著な例は、何よりほとんどの学生が中山間村を自分たちにとって魅力的な場所であることを「発見」していることである。

本事業に参加するまで学生たちにとって中山間村は「自分たちと無関係なところ」であり、「まったく魅力のない退屈な場所」であると思っ込んでいる。名古屋短期大学現代教養学科では「コミュニケーション力を磨く」という目的を掲げ、「教育」という名の下に学生たちを泰阜村という、「退屈な場所」へ連れだす。当然のごとく学生たちは口を揃えて「なぜ泰阜村へ行かねばならないのか」と拒絶反応を示す。翌日のフィールドワークを控えホテルに入ってさえも、数キロも離れたコンビニへ行こうとするぐらい都会にそまった学生たちである。しかしフィールドワークを終え、バスに乗り込む学生たちは寂しがり、涙を流して村から離れることを悲しむ。中には、「帰りたくない」とまで

言い出す。学生たちが口を揃えて「来て良かった」と言う。学生たちはわずか数時間で中山間村には都会にはない魅力があることを「発見」したのである。

さらに半年にわたって泰阜村へ通い、汗を流した学生たちは「都会と泰阜村のどちらに住みたい」という問いに、悩み、「カンタンには答えられない」と言う。つまり、今住む町のほかに、もう一つの自分の居場所として泰阜村を考えたいというのである。「ほっとする場所」「第二のふるさと」という学生たちの言葉には、これからも関わりたいという希望とともに、心の深いところで中山間村である泰阜村にある何かが生徒たちにとって必要なものと感じていることが表れているように思う。本事業を通じて、学生たちは確実に中山間村である泰阜村のファンになった。そして私たち教員は中山間村の潜在的な教育力に驚き、それを活かす教育を考えることが楽しくなっている。

4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月

大学1年生

講義「自然と生活」

NPO法人グリーンウッド自然体験教育センタースタッフ、地域おこし協力隊、泰阜村で暮らす人々による参加型の授業を実施しています。

- 4月 主体性、表現力、違いを認め協力することを学ぶワークショップ
- 5月 講義「食を通じた泰阜村の自然と文化」
- 6月 体験「自然を楽しむアイテムづくり～村の木を使ったバードコール」
体験「箸づくりと泰阜村の自然」
ワークショップ「山村留学の子どもたちの暮らしからリスクを考える」
- 7月 講義「獣害対策とけもかわプロジェクト」
- 8月 安全管理①
- 9月 安全管理②+試験



秋のセミナー
ファミリービレッジ 事前学習

山賊キャンプ 事前学習



秋のセミナー
ファミリービレッジ

山賊キャンプ 思い出会



空気がおいしいやすおか村は
水や食べものもおいしい！



国内研修

信州子ども山賊キャンプ 7月下旬～8月下旬

「くうねるあそぶはたらく」、子どもが主役のキャンプに、名古屋短期大学の学生が毎年ボランティアスタッフとして参加しています。



大学2年生

ミーティング

ミーティング
「おやき作り」

村での活動
泰阜村をもっと知ろう
～田植え、
野菜の定植体験、
竹宵づくりの見学～



ミーティング

村での活動
竹林整備について
教わる～竹伐体験、
竹炭づくり～



ゼミナール

テーマ「泰阜村のむらづくりに役立つことを考え、実行しよう」演習 卒業研究

村での活動

竹細工づくり
～竹の種類や特性を学ぶ、
器や箸づくり～



夏合宿

テント張り、火おこしなど、
電気もガスもない場所での
暮らし体験
竹宵づくり、流しそめん、
村民夏祭りでの
竹宵披露



大学祭

お世話になった方との再会!!

泰阜村の人々が
野菜や果物を持参し、
村をPRします。



愛知教育大学 1コマ担当

愛知教育大学の1年生に
2年間の学びを伝えました。
学生同士のまなびあいです。

村内報告会 村長さんに提案しました!

泰阜村の人々に
2年間の学びの
報告と提案をしました。

講義「生活と医療」 前期15コマ

日常生活に存在する様々なリスクについて、ワークショップやグループ学習を実践的、具体的に学ぶ参加型授業。ルールは「参加」と「自己決定」。自分で考えて、自分で動いて参加すればするほど楽しくなり、学びが深まる授業です。

- 4月 対象者理解ワークショップ/熊本地震から学ぶこと(ワールドカフェ)
- 5月 判例検証ワークショップ/保険の仕組みワークショップ
- 6月 視覚と聴覚のリスク/子どもと大人の違い
救命率比較ワークショップ/被災地からの学び
- 7月 リスクを考える
- 8月 初動とは
- 9月 心肺停止/ケガ病気など/まとめ/試験



茶谷先生談

でもね、「ひとねる大学」は違うんですよ。都会から何かをしてあげているという仕組みではない。地方も都市部もお互い対等に持ち寄り、育ちあう、まなびあう、なんです。だからこそ、地方も都市も、田舎も都会も、そこに暮らす人々が育ち、変わる。両方が変わっていく。どちらかが片方何かをするという仕組みではないんですよ。だから、おもしろい。そのことに気づいた学生は変わったし、僕も変わった。村の人々も変わっていく。

講義を受けて...

話を聞くだけでなく、みんな一緒になんかやろうってグループワークとか実践をしています。先生の目線がいつも一緒っていうか、だからちゃんと聞こうと思った。

信州子ども山賊キャンプで...

正直、単味がほしくて。そして、経費がかからない。子どももそんなに好きじゃないし、全然考えていなくて、そんな状況で行って想像を絶するくらい大変でした。大変だったからこそ、初めて責任を感じたというか、子どもの前に立つことで子どもたちには大人として見られる。今までそういったことがなかったから、子どもとして生きてきたから、ここでしっかりしないといけないなと。

自分でつくっていくことの楽しさとか、大変だからこそ得られる達成感もあって、ご飯も味の美味しさよりも、みんなでつくった美味しさ、そういうものを得ることができて、よかった。

ファミリービレッジで...

暮らしは大変だけど、あたりまえのことがあたりまえじゃないという話を聞きました。

ゼミナール活動で...

最初はちょっと...と思いました。入ってみて、面白い。竹を伐った時の笑顔はもう無意識です。竹を伐るなんてことはないし、やったことがないから、楽しかったです。

キャンプ場が思った以上に何もなくて、電気がなくて真っ暗。トイレも離れているし、水もないし、過酷でした。

自分達がやりたいことを、ちゃんとしたら、村の人達が助けてくれるなって感じた。もし1つでもやりたいことかあったら、助けてくれるし、それを後押ししてくれる、協力してくれる、絶対手伝ってくれるっていうことを伝えたい。

ファミリービレッジ 村の人の思い

毎年9月に現代教養学科の1年生約90名が、20軒程の家庭に分かれて訪問します。異文化を体験し、異なる世代の人とのコミュニケーション能力を育みます。オリエンテーションや報告会も実施。7年間続けています。

宮島康夫さん 吉子さん
ご夫妻



ファミリービレッジだけでなく、今年は名古屋短期大学の茶谷ゼミナールが夏合宿を行い、学生と茶谷先生が民泊しました。3日目に夏祭りがあり、終わってからみんな一緒に囲炉裏に集まり、泰阜村での体験についての感想などを話しました。充実した意見交換ができ、私達も勇気づけられました。若い人が泰阜村に来てくれることは、とてもいい。若い力が入ると村自体が明るくなる。訪れてくれた学生が数年後また来てくれるような村にしたいです。

柿本 肥巳さん



生まれも育ちも泰阜村。家は代々農家で、一度も村を出たことはありません。学生の受入れは村から声を掛けられ6年ぐらいいかな。子どもが好きで、すぐにやろうと思いました。私が子どもの頃は、近所で助け合って生きていました。干し柿を食べ、お茶を飲みながら世間話をしていたので、近所の衆、だれが今どうなのかをみんなが知っていたし、農作業も助け合って行い、近所が家族のように暮していました。学生には昔と今の暮らしの変わりようなどを話しています。

羽太延幸さん たま子さん
ご夫妻



学生の受け入れは今年で3年目。横浜から移住しました。村営の借家なので畑もなく、農業体験も出来ませんが、家の中でリースを作ったり、畑を借りてトマトやキュウリを獲ったりしています。楽しかったですが、緊張感もありました。サツマイモを茹でて、こんな出し方でいいのか、このまま口に運んでくれるのかとか、そういうことまで考えました。うちの近くに高齢者向けのかたくりサロンがあり、毎回10人ぐらいいおばあちゃんたちが来ています。学生たちがおばあちゃんたちと話をする機会をつくりたいと思っています。

大学祭



Q.大学祭はいかがでしたか？

A. 学生さんたちが、先々月会った時と変わりなく元気できてくれたことがほっとしました。必ず顔をだしてくれます。

Q.大学祭で泰阜村をPRすることについて

A. 泰阜のよさを伝えることができ、私達も自信が持てるし、学生とのコミュニケーションの中から、力をもらえるのかな。それが生きがいにつながっています。泰阜の人にも伝えています。

泰阜村への報告会

村長さんをはじめ村民のみなさんに、2年間村に通って、何に気づき、何を学んだのか、泰阜村の魅力や学生の言葉で伝えました。おいしい食材、ゆたかな自然、人と人とのつながりを感じられるところ、そして、一番の魅力は「泰阜村の人」であり、「泰阜村の人と共にすることでわかる何か」。村の人からは「学生さんが来ることで村が元気になる」「触発されて、自分達もできることをしようと、地区で一人暮らしの高齢の方のお正月の飾りをつくっています」と、想いが交わる温かな空間となりました。



学生からの提案

- ① 気軽に訪問できる拠点をつくってほしい
- ② 離れていても、つながれるしくみがほしい
- ③ 村への交通アクセスを改善してほしい



愛知教育大学で「1コマ」担当

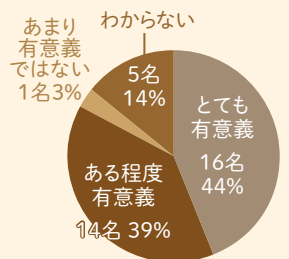
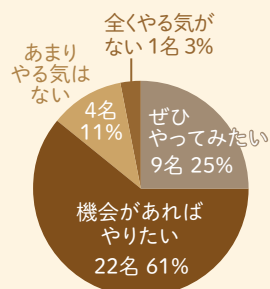
愛知教育大学の学生に、泰阜村での活動を通して学んだこと、「第2のふるさと泰阜」の魅力、村への提案についてのプレゼンテーションを行いました。その後3グループに分かれて意見交換。「村での活動はどうやって決めたの?」「コンビニはあったほうがいいと思わない?」「一番印象に残っていることは?」等、お互いに緊張しながらも質問が飛び交い、経験の交流を行いました。「泰阜村のこと伝わったかな」「関心持ってもらえたかな」とふりかえり、「泰阜村のことを全く知らない人に伝える方法を考えたい」とますます意欲的な学生たち。とても貴重な経験でした。



【愛教大学生アンケート結果】36名

【質問1】他大学との連携・協働の研究や学習に参加したいと思いませんか。

【質問2】教員養成大学でこのような自然体験活動に関する講義を受けることは意義がありますか。



愛教大生のコメント

生の声がきけて、どれだけ熱い思いをもっているかが伝わってよかった。

今年だけの活動ではなく、次の世代に渡される継続的なものであると聞いて、より深い活動だと思えた。

名古屋大と泰阜村の結びつきの強さに驚いた。なにもなくても、青年が学ぶ村としてのブランド化はいい考えだと思った。

学生から見た やすおか 泰阜村ってどんな村?

おいしいヤギのミルクをくれる ヤギさんこと 官島徳男さん

夫婦ラブラブ 官島さん

いつも漬物をくれる つげじい 林幸穂さん

竹の師匠 銀さんこと 林銀一さん

人とのつながりを感じられる村

あったかいだから〜♪ やすおか村♪

他にも素敵な人がいっぱいいます!

きっと皆さんも 人との出会いの楽しさに 気づくことができますよ!!

コンビニもない!

ポケ○もない!

信号もない!

なんで?

帰りた場所

第2のふるさと やすおか村

心安らぐ自然があって

空気も食べ物もおいしい

受入れてくれる人がいる



高齢化率 39.8%

人口 722世帯1698名 (平成28年12月1日現在)

総面積 64.59km² 山林が86%

東西10.8km 南北16.0km



今の世の中、娯楽とかすべてお金で自分を満足させるところがあるけど...

お金で買えないものにあふれています

ありがたみ

つながり

ユーティリティ

コネクション

今私達がふつうに食べたり飲んだり会いたい時に会えるのは当たり前だけど当たり前じゃない

それで経験したことを友達や泰阜村を知らない人達に話して、またそれが広がるつながり

中部地域における ESD推進のための先導的拠点整備業務 / 環境省
 発行 2017年3月
 発行者 環境省中部環境パートナーシップオフィス
 〒460-0003 名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル4F
 TEL 052-218-8605 / FAX 052-218-8606
 E-mail office@epo-chubu.jp URL http://epo-chubu.jp
 協働連携 泰阜ひとねる大学推進チーム

泰阜ひとねる大学推進チーム
 問合せ 泰阜村役場 村づくり振興室
 TEL 0260-26-2111(代)
 E-mail info@vill.yasuoka.nagano.jp
 デザイン・イラスト: 広告デザイン ソレイユ -Soleil- 印刷: ユニプリント株式会社

